

広島「原爆の日」・本紙記者ルポ

70年、平和へ誓い新た

本県被爆者、中学生も参列

広島は6日、人類史上初めての原子爆弾が投下されてから70年の「原爆の日」を迎えた。遺影を手に慰霊碑を見つめる遺族、ハンカチでこぼれる涙をぬぐう被爆者。平和記念式典が行われた広島市中区の平和記念公園は、深い祈りに包まれた。世界各国の人々が集う会場やその周辺には、本県の被爆者や遺族、平和を学ぶ中学生たちの姿も。平和の鐘が鳴り響く中、参列者はそれぞれの思いを抱きながら、節目の年の「ヒロシマ」で平和への誓いを新たにされた。

(横松敏史)

2、3面に関連記事

「多くの犠牲で今の平和」



午前8時15分、「あの時」を迎える。一瞬の静寂。黙とうの合図で、参列者約5万5千人が一斉に目を閉じた。鎮魂の鐘が静かに響く。70年前の惨禍に思いをはせ、犠牲者を悼んだ。参列者の眼前にある原爆死没者慰霊碑には、この日

までの死没者計29万7684人の名簿が納められた。参列席には、高齢の被爆者らの暑さ対策で白い大きなテントが並ぶ。中には時折風が入るが、次第に熱がこもり、汗がにじんだ。

献花、広島市長の平和宣言と続く式典。同市の小学6年、桑原悠露君(12)と細川友花さん(11)が「平和への誓い」を朗読する。「祖父母たちが、この70年間ヒロシマを生き抜いて、私たちに命をつないでくれました」と感謝を込めた。静かに聞き入る遺族や被爆者。本県の遺族代表、下野市の高橋久子さん(82)は、父親の遺影を胸に慰霊碑をじっと見つめた。

「自分自身の体力を考え、今回は最後」と臨んだ式典。「70年は節目として参列したかった。何か安らぎみたいなものも感じています」。その話すと、柔らかな顔をのぞかせた。年を重ねる被爆者の一方で、次代を担う中学生らも式典を見守った。県内からは過去最多の10市町、約180人の生徒が参列した。その目にヒロシマはどうか。初めて訪れた宇都宮市古里中2年、奥村昂央さん(13)は「平和の大切さが身に染みた」と真剣な表情で語った。

「ヒロシマが身近でないと感じていた同市陽東中2年、高久優真さん(13)は、実相を知りたいと参加した。この日の式典に向け、広島市主催の国内ジャーナリスト研修「ヒロシマ講座」に参加し、2週間近く同市に滞在した。体験を語り継ごうとする被爆者や伝承者ら多くの声を聴き、慰霊碑に何度も足を運んだ。手を合わせる人が絶えない慰霊碑。そこには、こう記されている。「安らかに眠って下さい。過ちは繰返させぬから」。この言葉を忘れない。